

地域包括ケアシステムと地域包括ケア病棟

平成 27 年 10 月放送

米島 學

日本は世界に類を見ない高齢化社会に突入しようとしています。敦賀市も例外ではなく、80 歳代、90 歳代の超高齢者がさらに多くなってきます。そのような超高齢者は持病を持っている人が多く、介護や支援が必要な状態です。持病の悪化などにより入院された場合には、入院治療を行っても病気が完全に治ることは難しく、退院されてからも地域で医療や介護を受け続ける必要があります。これからの医療は「入院医療から在宅医療への変換」が重要となってきます。地域の診療所の先生方のはたす役割は益々大きくなってきます。あるいは医療以上に介護や福祉の充実が大切になってきます。

国は団塊の世代が 75 歳となる 2025 年をめどに地域包括ケアシステムを構築しようとしています。国がめざす地域包括ケアシステムとは「重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供されるシステムです。つまり、入院が必要となった場合には入院治療ですが、基本的には地域での生活をめざすものであり、キャッチコピーは「ときどき入院、ほぼ在宅」です。敦賀市においても、医療と介護と行政が協力しあってこのシステムを構築していかなければなりません。

地域で介護や支援を受けている超高齢者で入院が必要となった場合にすみやかに受け入れ、治療やリハビリを行って地域に戻っていただくための病棟が地域包括ケア病棟です。昨年从这个病棟制度が始まりました。市立敦賀病院で



は地域のニーズを考え、福井県の公的病院の中で最も早く、地域包括ケア病棟を作り、運用しています。具体的には8つある一般病棟の一つを地域包括ケア病棟に変え、病状が軽快した患者さんを受け入れ、リハビリなどを行い、地域に戻っていただいております。比較的若い人や中年の方の病気を入院で治すのが一般病棟ですが、人口の減少に伴い一般病棟の必要ベッド数は減ってきます。

逆に超高齢化社会において高齢者の入院治療の基本となるのが地域包括ケア病棟であり、今後さらに増やす必要があります。市立敦賀病院では他の病院に先駆け、今月（平成27年10月）から2つ目の地域包括ケア病棟を作りました。引き続き、地域のニーズにあった病院であることを心がけています。